

Assembly East 2017

甲 2 テーブル 総評

テーブル参加者

富永（東大 3） 溝口（法市 3） 羽根川（立教 3） 塚越（青学 3） 梶（立教 3）
磯貝（立教 3） 平山（明治 3） 佐宗（武蔵 3） 井桁（立教 2）

ジャッジ

大和田（明学 4） 杉野谷（青学 4） 鵜殿（早稲田 4）

議論の流れ

はじめに

皆さんこんにちは。今回アッセンブリー東日本予選甲 2 テーブルのジャッジを担当させていただきました明治学院大学 4 年の大和田です。初めに今年度の甲 2 テーブルを観て抱いた感想を述べた後に本テーブルの三時間の流れを私の私見を交えながら残していきたいと思います。

去年同じ甲 2 テーブルでランクを競っていた私から見ると今回の甲 2 テーブルはとて面白い議論を展開してくれていたように思います。私が現役のときにこのような議論をできなかったことに対する後悔を感じつつ、本テーブルに参加していた現役生が非常に羨ましくなるような議論をしてくれていたのではないかと思います。ですから本総評を読んでいの方には今回の議論がどの点で優れていたのか、またより今回の議論を良くしていくためには自分ならどういった行動を取るのか等を考えながら読み進めていただきたいと思います。

議論の展開

[Narrowing]

本テーブルは梶（立教 3）の **narrowing** をもとに始まった。その提案に対して富永（東大 3）が一つの疑問をテーブルに投げかける。その内容は「誰が日本政府のタスク **make situation better for Japanese national(=m/s/b)**を定義するのか」というものであった。

Opinion presenter(op) と participants によるという回答のもと、各 op 候補に対して **m/s/b** のイメージを提示させること、**m/s/b** の定義は議論を通して形成されることを共有し

op 決めに進んだ。

op に立候補したのは 3 人。溝口（法市 3）、塚越（青学 3）と羽根川（立教 3）であった。以下にそれぞれの候補者の意見概要を記述する。

各 op 候補の opinion sheet

溝口：臓器移植をトピックに据えた通常のプロシ。TG のマイナスをいかに改善するかを m/s/b のイメージとして提示した。

塚越：臓器移植をトピックとした通常のプロシ。詳しい検証方法は明らかではないが「誰が臓器を持つに相応しいか」を論点として掲げていた。また m/s/b のイメージとして最大多数の最大幸福という功利主義の思想を引用していた。

羽根川：臓器移植をトピックにしたニュープロシ。医療の目的や医療倫理という問題と絡めて日本政府がドナーを強制できる範囲を決定することを論点としていた。国民が納得することが m/s/b につながるという主張を持っていた。

各候補者に対していくつかの質疑応答を経て op に羽根川が選出された。

[個人的な感想その 1]

今回 narrowing で提示された m/s/b の定義の仕方とその価値観の共有というのは非常に大切なものだったと私は思います。Narrowing もしくは功利主義という考え方について参加者が深く考えられているかがよくわかる内容でもあり、op 決めの一つの基準として有効であったと思います。

[羽根川のプロシシート概要]

以下に羽根川のプロシシートを載せておく。（ディスカッション中に羽根川がプロシを書いたチャートを見逃したのでふんわりとしたものになりますがご了承ください。）

[Topic]

Organ Transplant

[Procedure]

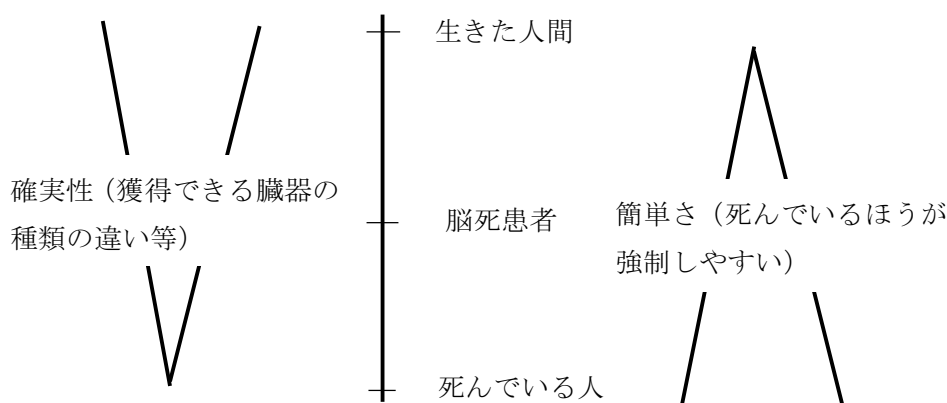
1. Confirm SQ
2. Decide the definition of “Ethic”
3. Decide the definition of “Medical Purpose”
4. Make a new law from 2nd and 3rd steps
5. Comparison

最初に提示されたプロシはおおよそこのような形であったように思う。後に議論を通して改変されていくので大体で良いものとする。

羽根川のアピシは臓器提供を強制化させる中で3種類のドナー（すでに死んでいるもの、脳死状態のもの、そして生きているもの）に焦点を当て、それぞれのドナーに臓器提供を強制させられるのかを議論するアピニオンシートであった。それぞれの法的実行性を医療の目的、医療倫理という考えから立証し最終的な政策を作成することが主な目的となる。

また羽根川自身が議論をするドナーの順番として簡単さ（強制することの実行性の高さ）と確実性（患者をより確実に救うことのできるドナー）に関する価値観を共有していた。この価値観は後に溝口によって提示されるアイデアやプロシの検証手順としても地味に重要なものであったように思う。

[ドナーに関する羽根川の価値観]



この図の手作り感はなかなか出せたものではない。

[アピシ検証]

羽根川が提示したプロシの検証前に富永の提案を中心にプロシの修正が行われた。富永の提案は「プロシの 2nd step と 3rd step を入れ替えるべき」というものであった。いくつかの質疑応答とマイナーチェンジを経た結果富永の提案が受け入れられることになった。

ここでジャッジをしていた大和田が椅子を引いた際に誤って黒板消しクリーナーのスイッチを入れてしまう。「やったよこいつ、、、」と言わんばかりの視線を感じながらもジャッジを続行した。

[個人的な感想その2]

まず図らずも黒板消しクリーナーのスイッチを入れてしまったことにお詫び申し上げます。

今回のテーブルはみんなで議論を育てていこうといった姿勢を感じるテーブルで、富永君の提案に関しても食って掛かるような人はいなかったです。その姿勢は議論を円滑に進めるうえで非常に良かったと思うのですが、逆を言うと、批判的な姿勢が足らなかったように思います。顕著な例としては磯貝君から提示された「**Medical Purpose** に関する議論は必要なのか」というダウト性の高い **Q** に対して富永君が「医療論題を話すうえでは必要なのではないか」という回答をし、そのまま受け入れられた場面です。確かにそれらしい考えですが本当にそれでよかったのだろうか疑問が残ります。富永君の回答に関して言えば彼の論拠はややいい加減であったと私は思います。またテーブル全体としても批判的な姿勢の欠如が間接的に順位に関わってくることになっていたと私は思います。

[1st step]

プロシの修正後 **SQ** の検証を行うステップに進む。途中休憩に入るまでの間で主な議題となったのは「もし供給（提供された臓器の数）が需要（患者数）を上回る事態が起きたらどうなるのか」というものであった。仮に3種類のドナーからの臓器提供を強制した場合、おそらく供給過多になるのではないかとという予測であり、その場合は段階的に政策を緩和すべきなのではないかという主張が隠れていたと私は認識している。この疑問に対し羽根川は「仮にそのような結果となった場合は政策を停止、または臓器バンクを使用することが予測される」という回答をし、一応収束した。またこの議題は後に溝口が提示する意見に影響を及ぼしたと私は考えている。

その後インターミッションへ

休憩中は参加者全員が喫煙者、非喫煙者問わず喫煙所に集合し和気あいあいと会話をしており非常に良い雰囲気であった。この光景からも参加者全員が議論を共創しようという姿勢が感じられた。

その時の様子がこちら



とても仲がよさそうである。

インターミッション後、1st step の検証を続け、富永の solution に関するダウト、塚越の臓器の選定の仕方に関するダウトが共有されたが時間内に提示されることはなくその全貌はわからないまま 1st step の検証を終えた。

[2nd step]

前述のプロシの改変をもとにここでは「強制するドナーを決定する」ことを目的とする議論が行われた。ここでまず溝口が提案ないし意見を提示した。溝口の意見は「国民の意思に基づいて臓器提供を行えば様々な問題点が解消される」、「臓器を使用するにあたってその優先度（どのドナーのものをを使うか）を議論する必要がある」というものであった。

その最中にジャッジをしていた大和田は再び誤って黒板消しクリーナーのスイッチを入れてしまう。皆呆れた様子を見せながらも溝口の意見の検証を続けていた。

テーブルメンバーによって情報整理が行われ、溝口は彼の提案のメリットとデメリットを提示したが富永が溝口の提案によって羽根川が本来想定していた議論から離れてしまうことを危惧し、羽根川が溝口の提案に乗らなかったことで議論は収束した。

[個人的な感想その3]

個人的に溝口君の意見は核心をついた議題であったと思います。しかしその有効性をテーブルに伝えきれなかったのは非常に残念でした。ここではもし自分があのテーブルに現役として参加していたらどうしていたかを参考までに載せようと思います。

まず私は溝口君の提案の「優先度をつける」という点に着目します（実際塚越から提案の内容を分けないかといった趣旨の発言はあった）そのうえで羽根川君の提示するプロシに対しても「そもそも強制化は医療の目的や倫理観に関わらず実行性がある」という主張をする（これは普段私たちが扱う **problem-solvency format** の **practicability** による）そのうえで今ある議論によって得られる結論は実行性を確かめるものではなく、臓器を使用する優先度を導くためのものであるという主張が行えると思います。おそらく溝口君が想定していた内容からはかけ離れてしまっていますが供給過多の問題と組み合わせてみてもアリな議論だと個人的に思います。本テーブルで批判的な姿勢を持ち、溝口君の提案を柔軟に解釈すればあり得たかもしれない議論だったと思います。

次に羽根川がこのステップでの議論の仕方について提案を行った。羽根川の主張としてはドナーを三種類（死んでいる者、脳死患者、生きている者）に分け、それぞれのドナーを強制する根拠を **medical purpose** を用いて提示し、その反対意見をテーブルメンバーから倫理を根拠においてぶつけさせるというものであった。富永を中心に検証方法の理解と修正が加われた。

[検証開始]

第一段階として死んでいる者をドナーとして強制できるのかという議題に進む。羽根川の肯定する意見としては「強制することで人を救うことができる」といういたってシンプルなものであった。その意見に対して梶と塚越が別々のアプローチでアイデアを提示する。

両者のアイデアは以下の通り

梶：Own will の尊重（私はこれを自己決定と解釈している）こそ最も重要なものである
塚越：患者の意思に関わらず命を救うことができるという事象にのみ焦点を絞るべきである。

このときジャッジの大和田は携帯電話を充電するために電源を探してウロウロしていた同じくジャッジの鶴殿から着想を得て黒板消しクリーナーのコードを抜くというファインプレーをし、甲 2 テーブルの平穏は今後保たれることになる。

富永を中心に両者の意見浸透が行われ、それぞれ梶のアイデアは羽根川の主張と対立する別のロジック、塚越のアイデアは別の議題であるとして流されることとなった。

残り時間を考慮した溝口によって結論を投票によって決めようという提案がなされそれに伴い、富永によって羽根川と梶がそれぞれプレゼン行い質疑応答をした後に投票を行うこと、結論を「死んでいる者に臓器提供を強制できるか」という一点に絞ることが確認されその提案が採択された。

最後の議論は「臓器提供を強制するにあたって命を救うという大義名分を国民が納得できるのか」という議題に沿って行われた。羽根川の命を救うことが大切であるという論と梶の自己決定に関する論を対立させたうえで国民により都合のいい考え方はどちらかというものだったと解釈している。

その流れに沿ってプレゼン、質疑応答を経て決議を取った結果、反対多数で強制化は否決された。結論として「強制することは不可能」「医療の目的においては自己決定が優先される」が確認され、2017 年度のアッセンブリー東日本予選甲 2 テーブルの幕が閉じた。

あとがき

今回の議論、個人的には良かったと思います。ただ一つだけ小言のようなものを言うなら、今回の議論はかなり危うかったとも言えると思います。要するに一般的に「くそ」と呼ばれる議論と紙一重のすれすれのような、地雷原を全速力で駆け抜けたような、そんなディスカッションだったのかなと、、、。というのも今回のまりん君がだしたオピシはお世辞にもしっかり詰まっているとは言えない内容で、みんなが協力する姿勢を見せたからこそなんとかディスカッションの体裁を保っていたのだと思います。

ところで僕の大学の先輩である某む〇つさんという方がよくこんなことをおっしゃっていました。「ディスカッションのクオリティはオピメの出来による。」その通りだと思います。オピメがちゃんと定義を詰めていなかったり、プロシーディングができていないと自然と議論は停滞します。その場の参加者が思っている以上にジャッジをしてみるとそのことがよくわかります。そういった意味では今回のディスカッション、まだまだ改善すべきところはあったのではないのでしょうか？もし最初からプロシが試行錯誤の上に成り立ったものだったら順番を変える必要もなかったかもしれない（試行錯誤の結果だったらごめんなさい）その時間を使えば最後の議論も投票ではなくとことん内容を議論することができたかもしれない。もしかしたら違う結論になっていたかも、、、。もちろんすべて結果論です。今更ブーブー言うのはナンセンスかもしれないのですが、あり得たかもしれない一つの議論がある以上改善の余地は確かに存在します。そのことをしっかり理解したうえで引退生活を楽しんでいただきたいなと、思うのです。

最後になんかこんなことを言ってしまうって申し訳ないのですがこのテーブルのみんなに与えられる最後のリフレだと思って読んでいただけたらなと思います（いげ君は来年も頑張って）ディスカッションに区切りはあっても終わりはありません。きっとみんな素晴らしいディスカッサントになれると思います。みなさんが魅せてくれた議論に感謝しながら僕のパートを終わりたいと思います。お疲れ様でした。

来年ジャッジをする際は黒板消しクリーナーに気を付けてください。

順位と選定理由

文責：杉野谷（青学4）

三人の見解について

選定理由について先に述べておきたいのは今回順位の選定においてジャッジ間の相違はあまりなかったということです。その理由は一人一人の役割が明確であり、同じ役割の中での順位の差は介入量の違いであることを意識してほしいと思います。役割が被ればそれだけ自分の有効的な発言ができる機会は少なくなります。よってこの順位もそのような点を意識すればまた大きく変化したのではないかと思います。以下、順位と理由です。

1位 富永（東大3）

このテーブルの中では羽根川のニュープロを瞬時に理解し、議論の形に落とし込んだのは間違いなく、富永である。介入量も多かったが、その中でも羽根川のプロシの矛盾点を突いた。

点や話の取捨選択を行っていた点が最も評価すべき部分だった。ただ終始富永の高いオーソリティーと強い推進力のせいか、テーブルメンバーの理解に差があったとしてもそのまま進むことも多く、溝口がそのフォローに入っていた場面もあった。そのため中盤で倫理観の話が度々浮上し、富永が同じことを主張することとなった。これだけ無駄な部分を省き、意見を作り上げようとしたのに最後が **voting** というのも些かもったいない気がした。それこそ富永自身の **m/s/b** という観念と今回の **ethic** や **medical purpose** につなげた意見を聞いてみたかった。最も議論したい部分の時間を残すためにも、もっと丁寧に確認することができれば文句なしの圧倒的支配者だったと感じる。それを差し引いても富永はテーブルにおいては唯一無二の存在であったことは間違いない。今後は順位など気にせず、自分の理想のディスカッションを磨いてほしい。そしてディスカッションにおいて最も大切な「議論すること」を積極的に後輩に伝えてほしい。

2位 溝口（法市3）

このテーブルで富永を超える可能性があったとするならば溝口だっただろう。溝口の最も評価する点は話の具体化、抽象化がわかりやすくそして浸透しやすいところである。プレゼンのうまさもあり、富永の進行を終始支え、羽根川、梶のアイデアをテーブルに分かりやすく落とし込んでいた。しかし後半になるにつれ介入量が減った点やプロシ自体への直接的なダウトや意見が少なかった点が1位と2位を分ける理由となった。それこそ終盤の富永の意見により「死んでいるものに対しての臓器移植」だけに結論が出ているので溝口の言った「優先度」はもっと効力をもったのではないかと考える。この代で純粋にハンドラーと呼べるのは溝口だけではないかと思う。彼のハンドリング能力はファイナリストに匹敵するものがある。だからこそ、今後そのスキルを余すことなく後輩に伝えて欲しい。さらに溝

口自身もハンドラーとしてだけでなくオールマイティーに議論できるポテンシャルがあると思うので現役引退をしたからといって隠居せずさらに成長し、ディスカッションを牽引する存在になることを期待している。

3位 羽根川（立教3）

この甲テーブルの中でニュープロを積極的に提示したところに羽根川の枠にとらわれない自由さを感じた。同質化した議論の多い昨今のディス界においては現役も意識して欲しい部分のひとつである。ニュープロで陥りがちなプロシ争いや手順の理解の相違があったものの最終的に結論を得る事ができたのは羽根川の柔軟な対応やロジック提示があったからではないだろうか。しかし上の二人と大きく差がある。その理由としては富永のSを受け入れる形で議論が展開することが多かったのも終始富永ベースになりがちだったことと羽根川が提示していた「倫理観、医療目的を話す事」や「さまざまなTG（living/brain dead/dead）で結論を出す」という二点に置いての定義や話し方の複雑さを説明しきれなかったことが上の二人との差ではないだろうか。改善点も多々あると思うので今後またニュープロに挑戦してほしいところではあるが今後留学に行くそうなのでこの結果を踏まえ、英語力思考力どちらも磨いて来年、さらに進化した羽根川になって帰国してほしい。

4位 塚越（青学3）

適宜QCを行っていたためこの順位となった。ニュープロにおいてOPのスタンスを確認するために一見些細かもしれないけれど定義やSQとAPAの違いを聞くことはOP自身だけでなくテーブルとしての理解を統一するために非常に大切なことであったと感じる。だが発言量の少なさや、QCを確実な形でサジェスションにつなげられなかったことが上位と差がついた原因である。また、自身も羽根川の「臓器移植を強制する理由に」反論を示していたにも関わらず、その意見を確実な形で結論につなげることができなかったのはとても惜しい所である。議論するだけのポテンシャルはあったと思うので今後はCPとして積極的にハンドリングスキルを磨き後輩に継承してほしい。単位修得や留年がやや心配ではあるがディス界での仲の良さを活かし、これからもたくさん成長してほしい。

5位 梶（立教3）

中盤で羽根川のプロシに対して意見を述べていたものの、介入が断片的であったためこの順位となった。このテーブルでは富永を除く多くの3年生が似た介入のしかたであったり、そこまで明確な意見を序盤から主張していた存在がいなかったりしたために4位以下の順位はひとつの発言によりいつでも変化しただろう。それだけにもっと羽根川の結論に直接的にアタックする対立軸を提示することができたのではないかと思う。梶は比較的意见として言葉にはしていたものの自らプロシ上に変革をもたらすようなサジェスションがなかったところにもったいなさを感じた。先日、今後の目標として「富永を超える」と言

っていたので是非とも現役さながらの熱意でディス界を盛り上げてほしいと思う。一応期待している。

6位 磯貝（立教3）

このテーブルでは磯貝の得意とするハンドリングやトリートを 100%発揮していたとは感じられなかった分ジャッジ陣ももったいなさを感じている。それこそプロシに思うことはあったのではないだろうか。今回あまり見られなかったのが富永に対する批判的考察である。もちろんプロシを作り上げるのに協力的なことは大切であるが、ただ支えるのではなく自分の価値観というのを提示してほしかったところである。今回出し切れなかった実力はおそらく後輩にとっては必要不可欠なものであるだろう。今まで経験した悔しさやつらさも含め、下の代に伝えてほしい。CPとして教えることは誰よりも上手いと個人的には思うので積極的にエデュケをしてほしい。

7位 平山（明治3）

介入が限定的であったためにこの順位とした。おそらく議論自体を理解する力は十分にあったのだろう。この順位に満足せずに今後のエデュケーションで自分の強みを発揮してほしい。また大学自体の環境も素晴らしいとも言えず、衰退と言われる中でチーフとして確実にランクをとったことは素直に尊敬する。来年も明治からランカーがでることを期待している。また、似たような境遇にある大学にも目をむけ持ち前の明るさとコミュニケーション能力の高さを活かし今後もディス界に貢献してほしい。

8位 佐宗（武蔵3）

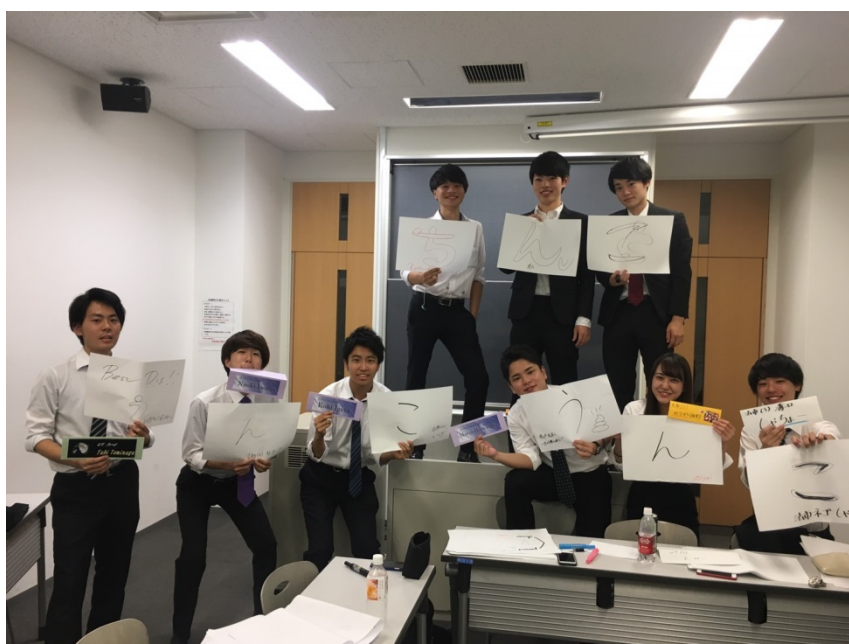
後半で何度かカンファメーションを行ったものの、その行為がテーブルに向けてのものというより自身の理解のためであったため、この順位とした。このようなテーブルで発言することにむずかしさや引け目を感じてしまうこともあるかもしれないがこのようなニュープロであればエリア的な視点で今のステップでどこまでが確認できればいいのかという発言に自分の理解のカンファメーションをつなげられれば順位は大きく変わったかもしれない。ともあれ、春セミでのくやしさをばねに努力し続けたことや武蔵という大学の躍進に心からおめでとうと言いたい。

8位 井桁（立教2）

発言がなかったためこの順位となった。今年は2年生で甲に行った人が二人、ということもあり、これからの責任やプレッシャーは大きいだろう。しかしながら自他問わずさまざまな大学の先輩たちのディスカッションを見て多くを学んでほしい。そしてこの甲テーブルで感じた事は忘れてはいけない。来年台頭してくるであろう同期や後輩たちに負けないようにこれからも頑張るって欲しい。今後の井桁の活躍に期待している。

みんなを偉そうに評価できる立場ではありませんが、今回の甲テーブルは終始笑顔でいい雰囲気だったと思います。細かくみればあれがだめだとかもっとこうした方がよかったとかあるかもしれませんが、何より富永君が今迄見せた事のないような笑顔で「楽しかった」と言っていたのを見ていいテーブルだったと感じました。現役で競技デイスをして楽しかったなんていえることはめったにありません。無論、現役引退という解放感もあったのかとは思いますがなかなか得られる感覚じゃありません。大切にしてください。そして自分が満足するよりも難しいことは後輩をディスカッションで楽しませ、満足させることです。君たちにはそれができるだけの素質が十分にあると思います。そしてあまり排他的にならないように気を付けて、自由にやりたいようにやって下さい。

ランクだけとって何もしないのは駄目です。
あと机の上に乗るのも如何なものかと思います。
お疲れ様でした。



Discussion の傾向とその他コメント

文責 鵜殿 若菜(早稲田 4 年)

2017 年のジャッジ基準局長を勤めていました鵜殿です。自分の現役時代を振り返ると偉そうなことは一言も言えませんが、自身の反省も心に留めつつ（書きながら自分の心にグサグサささってました）、今年の傾向とその他テーブルや現役に向けてコメントしたいと思います。全て私のディス観という名の独断と偏見に基づいて書かれており必ずしも正しいわけではないので、自分の頭で考えながら読んでくれると嬉しいです。

Discussion の傾向

今年度は去年度と同様 Discussion の傾向として議論の深さより議論の進行度に対する意見を持つ者がランクをとった者に多かった。ただその中でも上位につけることが多かったのは議論の深さに対して意見を提示できていた者である。（あくまでも傾向であり、すべての人がそうというわけではないことを断っておきます。）

Discussion には「進捗」と「深さ」という 2 つの軸があり、それぞれ「Suggestion」と「Argument」という形で議論に現れる。どちらも主張と理由を持ち合わせたロジックであるが、Suggestion は、議論の話し方を提案したりその場に適していない意見を適切な場所で話すことを提案したりするもので、エリアの理解（Problem Solvency Format(以下 PSF)に則るオピニオンシート(以下オピシ)であればなおセオリーを味方につけられる）や Suggestion の流れを繰り返し練習していれば身につく、習得しやすい技術である。一方オピシ上で出される Argument の多くはセオリー（エリアタスク等）に反しており、いくらオピシ上で話そうとしても前提としてエリアに即していないため流され、入念にロジックを詰めプレパしない限り立論させることは難しい。（セオリーに即した Argument は話しやすい）

もう少し噛み砕くと、意見は大きく way to talk (Suggestion) と contents to talk (Argument)(オピニオンシートも含む)があり、way to talk はさらに necessity to talk と procedure to talk の二つに分類できる。前提として contents がなければ way を提示できる技術を持ち合わせても意味がないし、necessity や procedure がなければ contents は話すことが不可能であるため、どちらも同等に重要なものである。それに対し、

- ①contents として自分の意見を持っている人が少ない
- ②アーギュメントが DA に流されるだけの道具になっている
- ③Opinion Sheet に Opinion がない

3 点が全体として顕著だった。

①は特にテーブル(1st でも 2nd でも)で 1 位をとる人に多い傾向である。テーブルを収めることがテーブルでハンドリングすることと同義であることが多いこと自体は悪くないが、a. nece のないアーギュを無造作に talk later にするだけで、実際にどう議論するかの procedure まで考えられていないこと
b. ハンドラーとして勝ち上がった結果、ハンドラーしかいないテーブルでの議論がサラデイスに陥ってしまっていたこと
が問題であると感じた。a. はアーギュメンターの責任もあるが、適切なエリアに行った際にどう話すのかを考え、自分の思い通りに話を展開できる人が真のハンドラーであると思う。b. は (私の代も陥っていたことだが)、ハンドラーで勝ち上がってしまうとアイデアを練ることの難しさや自分がアーギュを提示することで、周りに suggestion させてしまうことを恐れて出さない人が多いようである。

その原因の一つは②にある。アーギュメントはとりあえず DA に選ばれるために NFC で DA 提示の予約をする道具としか扱っていない人が多い。アーギュメントは DA>AD などの Stop Discussion を目指すものであるが、DA>AD のロジックを持ってアーギュをするならばそれを立たせる算段を考えストラテとして張るべきであるし、それがもし全員が肯定し難いものであるなら、オピニオンシート上でできるだけ否定しにくいロジックを考え、その交渉道具として自分の意見を肯定させることもできる。

ディスカッションとは合意を積み重ねてテーブル全体の結論を生み出すものである。また、ディスカッションとは正しさと正しさのぶつかり合いである。アーギュは一見「反論」しているように見えて実は自分の正しさを「主張」している。オピニオンプレゼンターの「前提」に乗ることとそれとは真逆の前提に乗ることでは物事の考え方が 180 度変わり、どちらの前提に立ってもどちらも正しい状態になる。どちらが正しいのか判断する際、テーブルメンバーの前提意識がバラバラだと、どっちが正しいのかわからなくなって迷いが出るので、判断に至るまでの過程 (オピニオンシート上) でロジックの前提を合意しておくことが立論する近道だと思う。新しい前提を正しく見せて常識にすることが大事。

また誰もが一度は疑ってしまうようなセオリーに異を唱えるアーギュ (a/I/1 TG が証明できても get ad すべきではないなど) は「間違っている」と反論することが難しいため、もう一度「セオリーを理解する」だけではなく「セオリーを思考する」ことに挑戦してほしい。

さらに not take plan は AD=DA で果たされるのだから、オピニオンプレゼンターのもつ AD>DA への反論の根拠を用いてアーギュするのも良い。(それが真のオピシへの反論だと思う) いずれにしても、AD の立論自体を否定するのはセオリーで守られていて難しいため (諦めるのではなくて、つまらない水掛け論を避けるため)、コンパリで戦うためにオピニオンシート上でアーギュとして戦略をばらまく意識を持ってほしい。

AD>DA への反論の根拠でアーギュすることは、オプレの持つ opinion への一番直接的ア

ーギューであり本質であると思っているが、③という問題があるため実行するのが難しい時が多い。具体的にいうと、オピニオンプレゼンターはその **mandate** について話したいからや、コンパリについて話したいから提示するのではなく、勝ちたいから・モデルオピシだから・モデルオピシじゃないと選ばれないから、という理由で提示されているものが多いため、オプレは大してそのアイデアに思い入れがなく、立論するためのプレパレーションをしている人が少ないように思う。自分が選ばれる可能性や毎度同じ議論になる可能性が高いことで自分が対処できる範疇に議論を納めておきたい気持ちもあるだろうが、新しいオピニオンシートでも核心をつく論点であれば選ばれるだろうし、対処できる範疇に納めたい気持ちはプレパ量の少なさにあると思う。

ハンドリング技術は議論の順序を整え、混乱の解決をもたらすためとても重要であり是非皆に身につけてほしい技術である。しかし、テーブルに意見がない状態でハンドリング技術だけ持ち合わせていても本末転倒であり、予想できる意見に対してのみ対処できる技術は身につけても仕方がないため、テーブルごとにその人オリジナルの意見を元にハンドリング技術を磨き合い、論理性を高めあってほしい。

テーブルへのコメント

この傾向を踏まえこのテーブルでよかった点は、互いのいい意見を「いい意見」としてテーブルに反映し合ったうえで結論を出した点と、役割分担がはっきりしていた点である。羽根川がこだわりを持った議論の土台を提示し、富永がより論理性の高い具体的論点を抽出、溝口は独自の視点を持った上で質の高いカンファメーションを行い.....それぞれがテーブルでの議論の土台をしっかり整えた上で、意見を交換して結論を出すという当たり前のようで普段は実現が困難な形に発展させていた点に好感を持った。勝ちたいという思いで傾聴力が欠け破綻してしまうテーブルが多い中で（勝ちにこだわることは悪いことではない）互いに得意なこと互いの持っている価値観を理解した上で尊重し議論に向かう姿勢にジャッジ一同高い評価をした。

その上で時間のなさからかテーブルに提示されたロジックの抽象度が高く、議論の結論が投票となってしまった点が悔やまれる。（結論を出すために自分が最低限守りたいものを理解・提示し、それ以外の合意を得られそうにない部分を妥協した結果だと思うので異論はないです。）あくまでも意見の提示をすることが大事なのでテーブルの結論のために我慢し妥協することは避けてほしいが、自分が実現したいこととテーブルの目指す世界を繰り返し考え意見の提示・妥協の両方を行う人が増えれば結論を出せるテーブルが増えるのではないかと思う。

3年生へコメント

これからエデュケやチェアパをする機会が増える3年生に向けて、

1. 自分のディスカッションを見つめ直してほしいこと
2. テーブルに参加するチェアパになってほしいこと
3. 後輩によってエデュケの方法を変えること

の3点に対してコメントしたい。(エデュケに関しては主に2つ上のUTOB 廣田さん(ペーターさん)にレクチャーしていただいたことが私の考えのもとになっています。)

1. は具体的に自分が現役時代に培った技術と考え方を今一度整理することである。自分がディスカッションをする上で悩んでいたことやそれを乗り越えた経験、具体的に何を行なったのか整理して伝えられるようにしておいてほしい。(性格とディスカッションはリンクしていることが多いから、これ整理すると就活にも便利です) 後輩のディスを見た上で長所と短所を見つけてあげて、長所はもっと伸ばす方法、短所は自分の経験から乗り越える方法を教えてあげてほしい。あくまでもエデュケは自分が得意なこと・乗り越えたことを伝えることが一番なので、もしスタイルの似ている同期や先輩がいたら重ね合わせて考えてあげる、または後輩とつないであげるのもいいと思う。ディスの上手い人がエデュケできるのではなく、困難を乗り越えた経験を重ね合わせて多く伝えられる人がいいエデュケーターであると思う。

基準局はディスカッションにおいてどのような発言を評価すべきという観点で、ファミレスで3時間以上ディスカッションをし続ける局でした。この議論をするために2年間ディスカッションをやっていたのではないかと錯覚してしまうほど(してない) 実り多い議論をした気がします。様々なディス観をぶつけあって一つの正しさ「ジャッジ基準」という結論を作るという経験をしたい人は基準局オススメします。

2. は後輩にとっても自分にとってもいいことが多いので実践してほしい。(もちろん2カンなどのコンセプトがあればそれに従ったほうがいい。) 後輩にとって一番刺激があるのはリフレで言われていることを実現している人ディスカッションをすることである。どうしても口だけだと具体的にどうすればいいのかわからないので、チェアパは自分の考えにディスカッションとして体現させてほしい。もし体現に失敗したとしてもそれはチェアパとしての成長につながるので、恐れなくてほしい。またチェアパとして大会ごとテーブルごとに伝えたいことをあらかじめ整理できるので、リフレの内容に困ることはなくなる。

3. は後輩の性格や考え方を見抜いた上でエデュケしたほうが効果的であるということである。褒めて伸びるのか叩いて伸びるのかだけではなく、答えを全て教えてから自分なりの考えを考えさせるのか全て自分の頭で考えさせるのか、技術を教えるのか実践させるのか

が先かなど、人によって成長の仕方は違うので、ぜひ自分がエデュケされた経験だけに基
づかず柔軟にエデュケしてほしい。

2年生へコメント

アッセンが終わったばかりのこの時期、夏休みも始まりディスカッションに触れる機会
が少なくなる人が多い。ディスカッション以外のことをするななどと断じて言うつもりも
ないが、一つだけ注意してほしいのは「関西遠征の時期だからプレパしなきゃ」「春セミだ
からプレパ始めなきゃ」とイベントに流されてプレパをしてしまうことである。イベント単
位でモチベーションを上げることは必要なことである。しかし、その考えでいくと春セミ直
前になって春セミで実現したいことと現状の力を考えて、実現したいことを妥協してしま
う人が多いのではないかと思う。短期的にできるプレパは限られているので、結果的に自分
がしたいディスカッションで自分が目指せるものが制限されてしまう。そうならないため
に今からでも

1. 自分が最終的に実現させたいこと
2. 自分が理想と考えるテーブル/ディスカッサント像
3. 今できることをリストアップした上で理想のために足りていないこと
4. 理想を実現させるためのマイルストーン（例：夏までに〇〇ができるようになる、関西
遠征では〇〇を習得する）

の4点について考えてほしい。私がお勧めするのは先にディスカッションに対する考え方
（コンパリ観などのディス観）を固め、技術的なものを習得し、同時並行でオピニオンシー
トやアーギュを作成しテーブルに臨むことである。何か一つの技術に特化したスペシャリ
ストになるもよし、複数の技術に精通するジェネラリストになるもよし、何をを目指すかです
べきことが変わるので、ぜひそれらを考えることに時間を使ってほしい。たくさんプレパし
たくさんテーブルを組めば力はつくがそこにモチベーションが備わってないと意味がない
ので、あくまでも逆算して実現したいことのために今必要なことを必要なだけしていくこ
とが理想だと思う。そしてその実現のためのためなら先輩をツカウことに躊躇わないでほ
しい。特に今年引退したばかりの3年生は尖ったディスカッションスタイルを持ち合わせ
たるつばなので、様々な考えに触れてほしい。

最後に

総評の期限を過ぎたこと長々とした駄文になってしまったこと申し訳ないです。ディス
界の人口減少などと騒がれていますが、何より大事なのは自分が楽しむことだと思うので、
きついことも多いかもしれませんが自分の置かれた立場に対して自分なりに考え工夫して
楽しむ人が増えればいいなと思います。